

平成十五年一月三日

第三一〇回史跡めぐり 資料

千住宿・千寿七福神を訪ねて

越谷市郷土研究会

第三一〇回 史跡めぐり

日時 平成十五年一月三日（金）

集合 越谷駅東口前 午前9時

行先 千住宿・千寿七福神を訪ねて

コース 越谷駅↓北千住駅

☆仲町氷川神社

（弁財天）

☆源長寺

（寿老人）

☆千住神社

（恵比寿天）

☆不動院

（福祿寿）

☆勝専寺

（毘沙門天）

☆本氷川神社

（大黒天）

☆長円寺

（布袋尊）

北千住駅

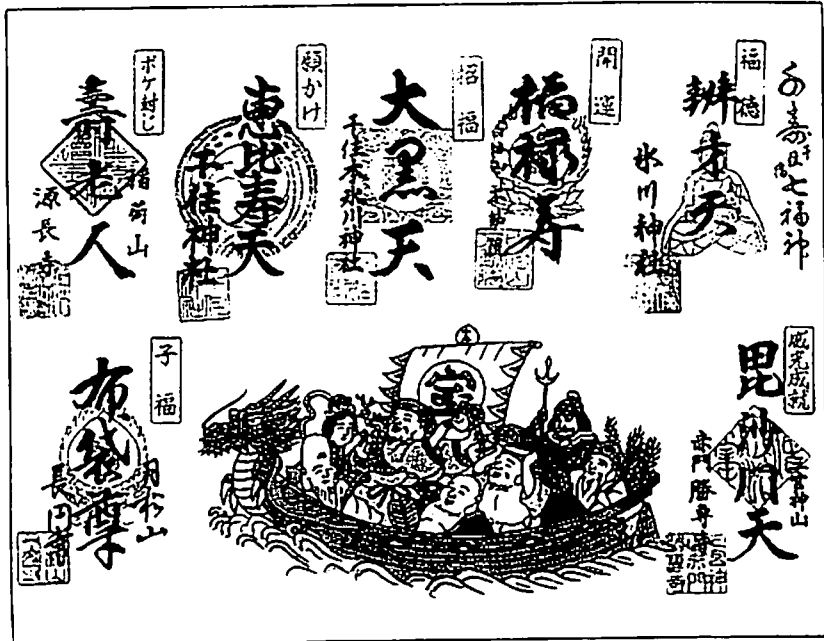
（解散）

参加費 金一〇〇〇円

（交通費・資料・保険料他）

案内者 幹事 西村 功

主催 越谷市郷土研究会



【千住宿】

平安時代の頃千住宿は元宿（今の元町）あたりにあつた。源義家が東北へ向かつた時、日が暮れて掃部宿と小塚原に川をはさんで野陣し本陣を掃部宿においたといわれている、その先六月町の炎天寺（小林一茶ゆかりの寺）付近に陣した。

鎌倉時代の千住宿は和田宿といつた。今の関屋町付近で、葛飾北斎の名画「関屋の里」はこの辺を描いたといわれている。この先北上して花畑の大鷲神社付近の鷲宿が次の宿であつた。

鎌倉末期の頃から、現在の千住一丁目・二丁目地区に集落が形成され始め、文禄三年（一五九四）に千住大橋が架けられ、慶長年間にはその他の集落も集約され、一丁目と五丁目迄の北組が出来、この頃に掃部宿の開発が始まりその地区が中組（掃部宿「仲町」と新宿「川原橋戸」後に河原町と橋戸町に分かれる）となつた。寛政二年（一六二五）日光道中の初宿と定められると隅田川南の二町（小塚原町・中村町）が加えられ南組とされ八町で千住宿が発足した。

新編武蔵風土記にはこの宿は野州・日光・奥州・常州への海道的第一にして、江戸日本橋より二里隔て、当宿より北の方草加宿へ二里八町、東の方常州海道、葛飾郡新宿へ一里半以上、三方人馬をだせり。と記されている。

当宿は寛永十二年（一六三五）に参勤交代が定められ、四・五月頃は日光社参なども加わり大いに賑わつた。常時五十疋の馬がいた。

江戸四宿（奥州街道の千住宿・中山道の板橋宿・甲州街道の新宿・東海道の品川宿）の中でも最も大きく立派な宿駅であつた。

【七福神】

七福神の起源及び由来などは諸説がある。日本古来の福神信仰や、中国仙人思想、仏教の福神などの信仰が、誰により始められたかは不明であるが室町時代末期には既に行われ

るようになり、次第に七福神として成立した。江戸時代になると幅広く庶民に行きわたり、町屋の人々が競って七福神を祀り、毎年正月には三三五五、七福神の祠を巡拝して七福を祈願する風習になった。

七福の語源については「仁王護国般若波羅蜜經」受持品によれば「南閻浮提なんえんぶだいに十六の大国・五百の中国・十千の小国あり。其の国土の中に七災難有り。一切の国王はこの難の爲の故に、般若波羅蜜を講じ誦誦すれば七難を則ち滅し、七福則ち生じ、萬姓は安楽にして、帝王は歎喜す」とあり、いわゆる「七難七福」の出典である。

千寿七福神は平成四年十二月に商店会、足立観光協会などの協力によって発足した。

七福神の出自・祀られる性格は次のようにいわれる。

恵比寿天

(日本)

福德をもたらす神

商売繁盛・大魚の神

清廉の心をもつ

狩衣・貫指くわしゆで風折烏帽子をつけ右手に釣竿、左脇に鯛をかかえる。鯛と釣竿を持った姿は「釣りして網せず」ということで、暴利を貪らぬ清廉の心の象徴

大黒天

(インド)

豊作の神・福德財宝

の神・威厳をもつ

狩衣・頭巾をかぶり左肩に大きな袋を背負い、右手に打出の小槌をもつ。打出の小槌の「ツチ」は大地の土に通じ、ものはすべて大地より出る。槌を持つのはツチ(土)から宝を生ずる意。

毘沙門天

(インド)

戦勝の神・威厳をもつ

護国守護の神

(多聞天ともいう)

忿怒の相を以て甲冑を着し、宝塔棒を執り人間世界の北方を守護し、財宝富貴を司る。

弁財天

(インド)

学問・財福の神・子孫
繁栄を司る神・愛嬌を
ふるまう

琵琶を弾じる姿態にして、出現が「河川の水」に關係する
ことから、とうとうと流れる川が、弁舌や音楽を連想
させ、また財福の神としての性格を有する。

福祿寿

(中国)

長寿・徳望の神・家内
安全・人徳をもつ・よ
い配偶者を得るを司る神

右手に杖を、左手に経巻を持ち、鶴を従え、短身で長頭
の老人とされ、中国の道教で祀る星宿の南極星の化身で、
人命を司るとされる。

寿老人

(中国)

長寿の神
長生きする

杖と団扇とを持ち鹿を伴う、読経の功德を集めて、星宿
の威光を増加するよう回向し、福寿無量、諸々事柄が目
出度く運ぶように祈念。

布袋尊

(中国)

宗教・福德の神・家運
隆盛・平和安穩を司る
神・度量をもつ

肥大した体軀から腹をせり出し、大きな袋を携える。七
福神中唯一の實在人物で、唐代末期に活躍。人の吉凶禍
福や天気を予測して適中しないことはなかった。和尚の
像をみると、我々に明日に希望を持って楽しく生きよ
うと語りかける。

【仲町氷川神社】

弁財天



【源長寺】 寿老人



石出掃部亮が千住の南堤外に広がる湿地を開発したとき元和二年に鎮守として勧請した。「新編武蔵風土記」に「別当は不動院、社中に観音を安ず。この像は元石出掃部亮が遠州より本木村に持来たりて守護佛とせしを、後又ここへ移して氷川社に祀ると云」とある。又「天神社：関屋にありし社を移せり、故に鳥居に関屋天満宮と扁す、御神体は菅公の像を安ず」とある。本殿の左側に小さな社殿がある、関屋天満宮である。明治時代の風俗画報に「石の鳥居をくぐれば、右に池ありその中島に弁天祠を安置す」と記されている。この「辯天像供養庚申塔」は元禄二年造立である。

浄土宗稻荷山勝林院寺号を源長寺という。寺地は、もと寿稻荷の社地であったが、関東郡代伊奈半左衛門忠次の命を受け、開基石出掃部亮が荒川治水の為の熊谷堤（熊谷く千住間）築堤の難工事を完成（掃部堤と名付けられた。そこでこの社地に慶長十五年（一六一〇）寺を創建し、旧主への報恩と、石出一族の菩提寺とした。寺号は忠次の法号勝村院源長からとったという。墓域に入ると、石出掃部亮の墓がある。

【千住神社】

恵比寿天



平安時代の延長四年（九二六）千崎稻荷として祀られたのが始まりで元寇の役直前弘安二年（一二七九）に勧請され、千住宿が出来るまで、稲荷・氷川両社が並んで造営されてあったので、「二つ森」と呼ばれたという。宿できてからは宿の西にあったので西森さまと親しまれ、明治になって両社が合祀して一社になった際、社名は西森神社と改められた。現在の社名千住神社となったのは、大正四年からである。

昭和二〇年四月に戦災にあい本殿・拝殿・摂末社・舞殿・社務所等十数の建物は焼失したが神輿庫はコンクリート建築のため焼け残り、中の一の宮神輿（文久三年作「一八六三」）千貫神輿と言われている、二の宮神輿（明治十八年作「一八八五」）はぶじだった。都内で戦災にあった神社で唯一焼け残った神輿といわれている。

【不動院】

福祿寿

白幡山薬師寺といい真義真言宗。鎌倉幕府滅亡の前年の元弘二年（一一三三）の創建。中居町の八幡社の別当寺だったので白幡山の山号があるといわれている。

昭和二十年の戦災で古い建物は何も残っていない。正面に「南無阿弥陀仏」右側面に「藝州」の文字、参道右手に大きな石塔が目につく。

左側面に「明治元年辰九月祠堂金三拾兩」と刻まれている。台座には「願主方頭石鍋友五

郎以下「夫頭」「指」役など二十数名が連記されている。戊辰戦争に千住近在から藝州藩の軍夫、従属者として参加し戦死した人々の霊を弔う供養塔といわれている。側面の「藝州」の文字は藝州公を意味しているともいわれている。

川魚料理人のひとたちが魚類の冥福を祈るために建立した包丁塚の碑がある。

左手には小さな無縁塔と常夜灯がたっている。無縁塔には万延元年（一八六〇）九月大塚屋建立とあり、台座には相模屋以下二十数軒の屋号が刻まれている。千住宿の飯盛旅籠屋の家名である。推して、病没した遊女達の供養塔である。そばに立つ常夜灯のか細さが、彼女たちの宿命を語っているようにである。

本院は千住宿の間屋場に近い所から、宿場関係の人々の墓石が多い。



【勝専寺】 毘沙門天

三宮神山大鷲院といい寺号は勝専寺、浄土宗の古刹である。創建は文応元年（一二六〇）で開基は新井兵部政勝、開山は法然上人の声咳にも接した勝蓮社専阿。寺号は開山の名をとったと思われる。本堂は異国調の建物であるが、昭和十三年の建造である。

本堂に本尊阿弥陀三尊像と寺宝千手観音像が安置されているが、普段は拝されない。

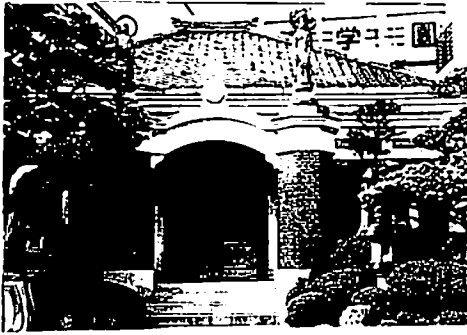
寺宝の「千手観音」は、開基兵部政勝の父図書政次が当地に閑居の一日荒川に網を投じ、その網にかかった仏像であるといったわっている。また、この仏像の「千手」が地名の起こりと伝えられているが異説もあり断定できない。

当寺に鷲明神の本地佛なる釈迦如来の鷲に乗ずる体相の像が祀つてある。(院号はこれより起こるといふ) 鷲明神の酉の市は花又が一の酉で、勝専寺が二の酉で、浅草が三の酉であったが、今は当寺の酉の市は全く忘れられた形となつてゐる。

又嘉永三年(一八五〇)三月四日將軍御名代堀田備中守正篤(下総佐倉藩主十一萬石)が百萬石の格式で行列をなし当寺にとまられた。それで寺門を俗に赤門と呼ばれ親しまれてゐる。

往昔、本堂の南の地に御殿址があつたといふ。秀忠公、家光公御鷹狩り御休憩所にあてられた。この所は寛永十四年茶席を設け、後に御殿が営まれ、年々金百両米百俵を給されたが、約四十年後、延宝八年の大風に倒されて廃止せられた。

山門横に閻魔堂がある。像寛政元年(一七八九)の開眼である、おえんまさまといわれ、大いに親しまれてゐる。天保九年(一八三八)刊の東都歳時記にも、一月十六日のえんま参りの項に、江戸府内の寺とともに正月とお盆の人出が特に夥しい。尚、明治七年四月、当寺を千寿小学校の仮校舎として「千寿小学」が創立した。



【本氷川神社】

大黒天



千住宿の中心千住三丁目の鎮守社である。境内に入ると新旧の二社殿がある。鳥居正面の木造社殿が古い方で今は大黒天が祀られている。右手鉄筋コンクリート造り社殿が、昭和四十五年完成の新社殿。そこにかかる扁額「素菱鳴尊」は昔からのものである。当社は鎌倉時代の徳治二年（一三〇七）牛田（千住曙町）の地に創設された。江戸時代始めに千住宿の開発の際、牛田住居の農民たちが、現千住三丁目に割り当てられて移住し、新町並みを造り上げたが、鎮守社は元の地に残し、千住宿北組三丁目の現在地に分社が造営せられ、荒川放水路の開削によって移転させられた本社を合祀し今日の姿となった。

【長円寺】

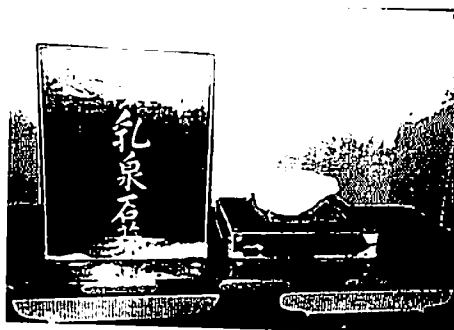
布袋尊

真義真言宗月松山照光院寺号は長円寺という。江戸時代の初期寛永四年（一六二七）に出羽の湯殿山の廻国行者雲海が、この地に草庵を結んだのが開山と伝わり同人が笈に納めて捧持したという薬師如来像が本尊である。寺の縁起に「本尊薬師如来像、御身一尺一寸五分立像。仏師定朝作也」とあるが、今は秘仏で尊容を拝見することができない。

本堂は明治五年（一八七二）の建立で、山門を入れてすぐ左手に魚籃観音堂がある。この観音像は隣接の氷川神社の御神体であった。つまり本地佛として祀られたものであるが、明治の神仏分離で寺へ戻された。

右側の八十八ヶ所霊場の石碓は明治の始めに建設され、入り口の四国八十八ヶ所の塔は山岡鉄舟の手になるといわれている。

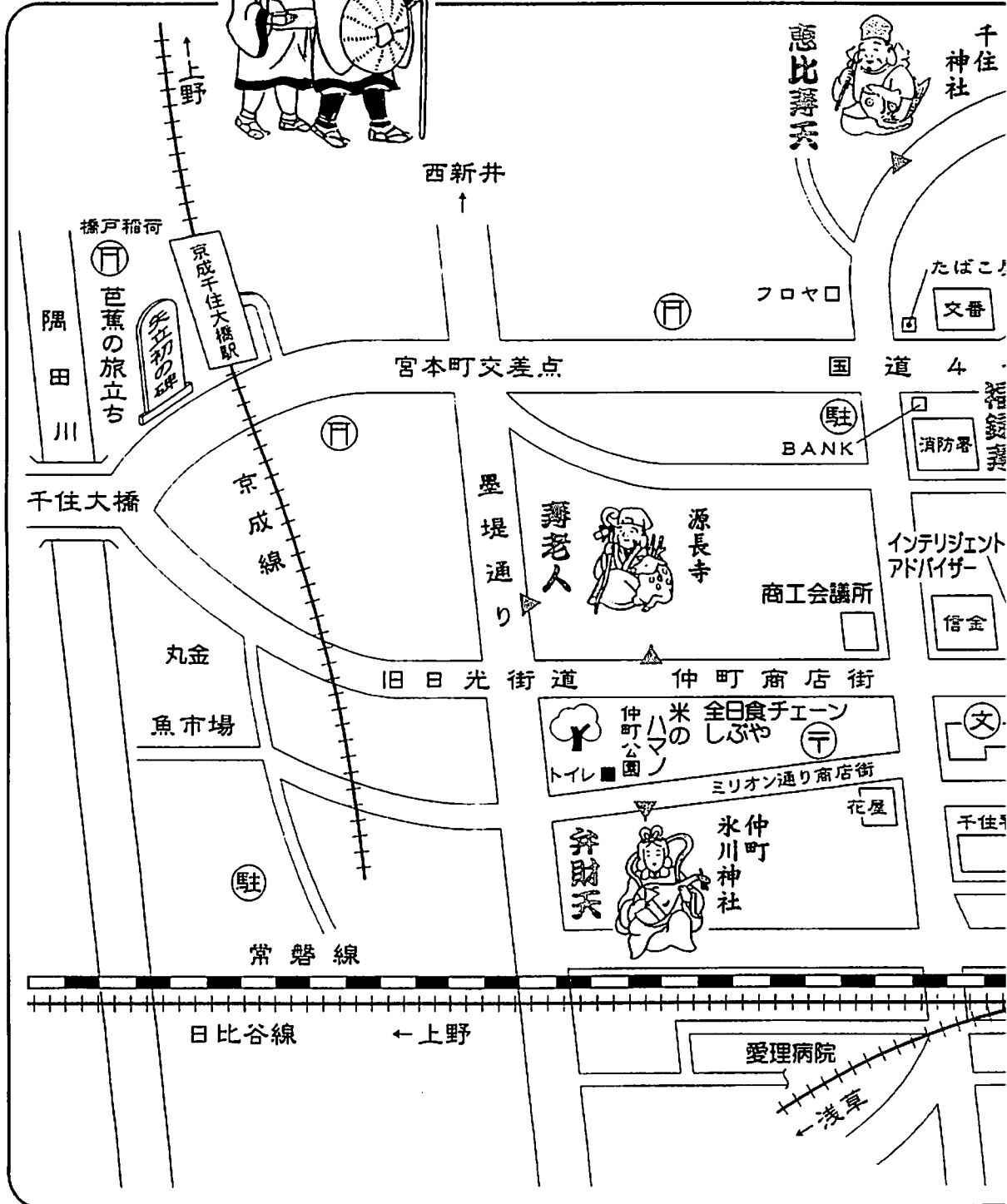
寺宝「乳泉石」は箱入りの白質石で、明治二十八年（一八九五）の書き上げ寺録に、「乳泉石の由緒は、女子にして、無乳出のもの、此石を削りて、用ゆれば、直ちに乳出る功奇妙の名石にして：今は之を与えず」とある。中津藩主奥平大膳大夫よりこの霊石にたいし、毎年金五両を明治維新に至るまで寄贈せられたと伝えられる。



参考図書

- 七福神めぐり
- 三心堂
- 足立区史
- 足立区
- 初宿・千寿食べ歩きまっぷ
- 足立区史跡散歩
- 学生社
- 二二八史跡めぐり
- 山田政信
- 足立都市活性化センター

不況通

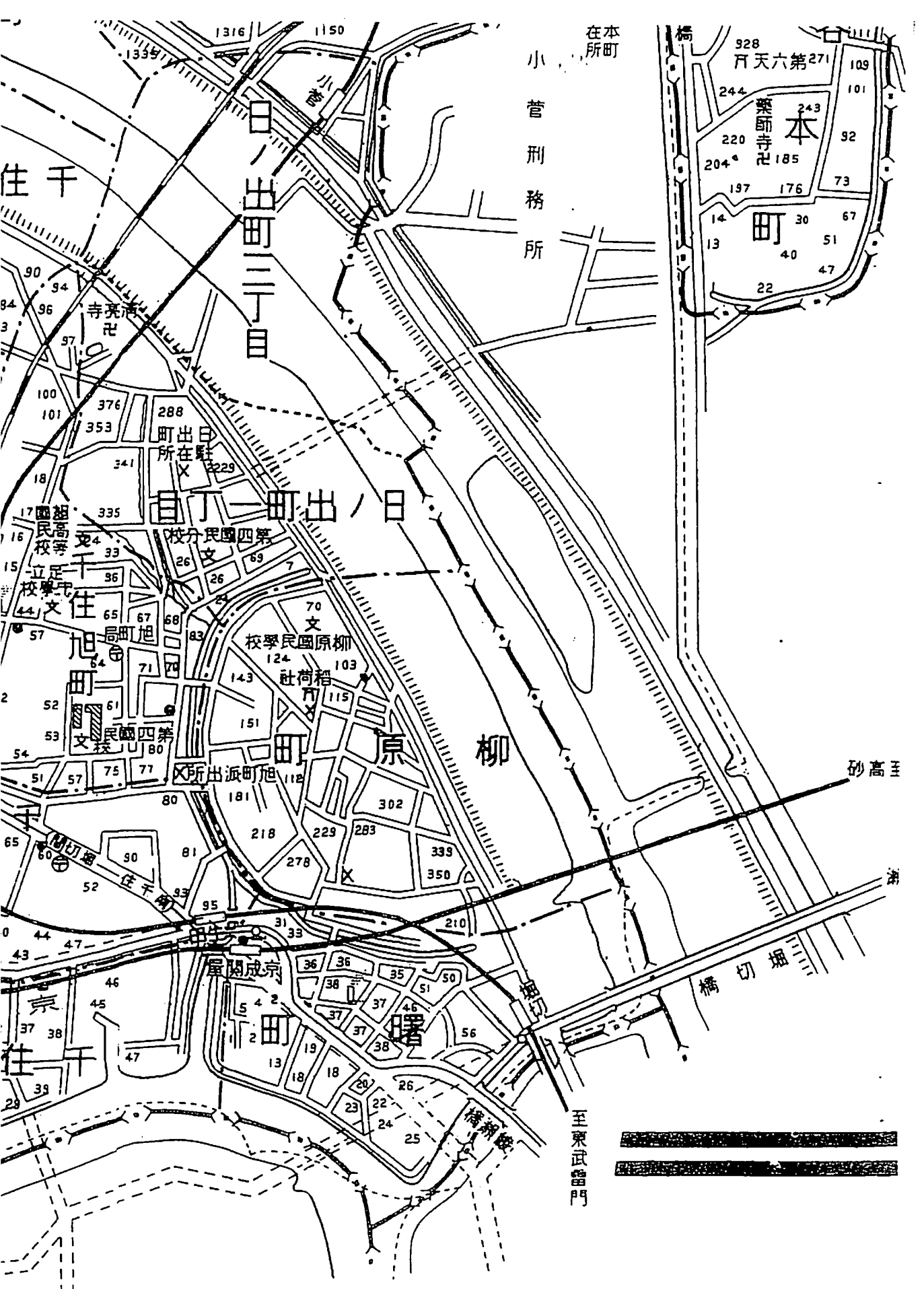


福招千の散

奥の細道 **千住宿**
千寿七福神めぐり

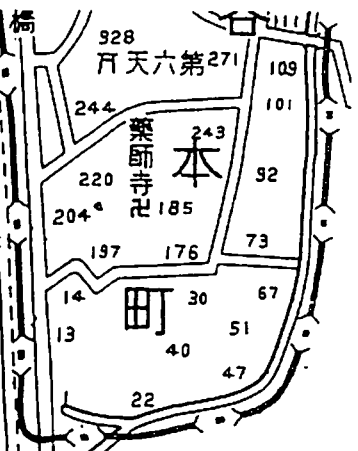
ほたるくんのヨシオ





在本所町

小菅刑務所



住干

日出町三丁目

日出町一丁目

柳原

至高砂

京成關屋

曙

至東武雷門

堀切橋

堀切橋

京

住干

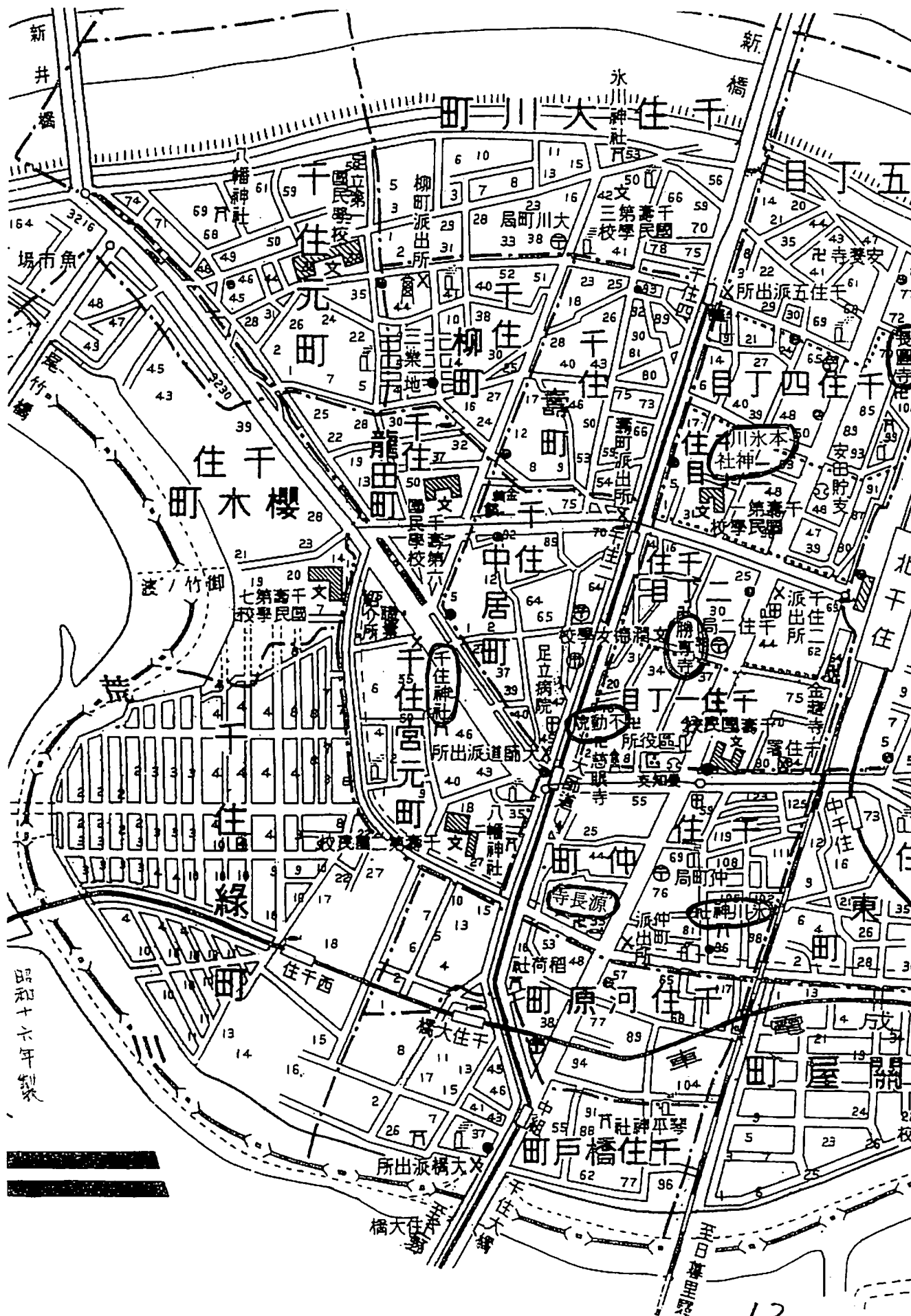
住干

住干

住干

住干

住干



昭和十六年製